

## 犯罪加害者の妻

どうしてこんなことになったのだろうか……。

私はなにも悪いことをしていない。それなのに、私はまるで犯罪者のように責められた。朝も、昼も、夜も、ずっと、ずっと。

私は悪くない。悪いことは何ひとつしていないのに、みんなから責められた。家族から、友人・知人から、隣近所から、世間から。罪を犯した夫よりも激しく、酷く。

私は極平凡な家庭に生まれ育った。父親はサラリーマン、母親は主婦兼パート従業員。生活は決して豊かではなかったが、とりわけ貧しいわけでもなく、不自由なく生活できていたと思う。小・中・高の一貫校に通った後、私立の短期大学に入学。そこで幼児保育を学んだが、生かす職には就かなかった。卒業間際、付き合っていた恋人の子どもを妊娠していることが判明し、そのまま結婚することになったからだ。

私の両親は「まだ若いし、妊娠なんて早すぎる」と反対したが、私は両親の反対を押し切った。私の両親は、彼氏が定職に就いていないことを不安視していたようだったが、そんな些細な問題は愛の力で乗り越えられると思っていた。この時は。

私も彼氏も互いにお金がなかったため、式は挙げず、指輪の交換もせず、書類だけを提出して夫婦になった。夫の名前は翔平と言って、私よりも五年上だった。私は彼のことを「翔ちゃん」と呼んでいた。

結婚する前、翔ちゃんは、私のお腹の中に子どもがいることを知ると、とても喜んでくれた。

「そっか、俺も父親になるのか。うれしいな。沙織、ふたりで一緒に幸せな家庭を作ろうな！」

そう言ってくれた時、私は本当にうれしかった。

だけど翔ちゃんは、結婚してからも定職には就かず、アルバイトを時々す

る以外は、昔からの仲間だという人たちと遊び呆けていた。私が家庭を顧みてと訴えても、「そのうちにな」とへらへら笑って聞き流すだけで、真剣に向き合ってはくれなかった。そのため、私が学生時代にアルバイトで貯めたお金はたちまち底をついてしまった。

子どもが生まれてからも、翔ちゃんは相変わらずふらふらと遊び呆けていた。仲間たちと吊るんでカラオケに行ったり、ゲームセンターに通ったり、ボーリングをしたり、海に行つてサーフィンを楽しんだりしていた。不思議とお金をせびられることはなかったが、かといって家庭にお金を入れてくれることもなかったのだ、私は両親に頭を下げてお金を借りて生活を維持していた。

父は私に、

「おまえの家庭はすでに崩壊している。すぐに帰って来い！」

と言ってくれたが、私は父の言葉を聞き入れなかった。この時はまだ翔ちゃんのことを信じていたし、何よりもそれでは格好がつかないと思ったからだ。

だが、こんな生活が一変する時が訪れた。

より悪い方向に――唐突に。

ある日、翔ちゃんが警察に捕まったのだ。容疑は殺人。いつものように仲間たちと吊るんで遊び呆けていた最中、たまたま通りすがった被害者の男性に因縁をつけ、お金を脅し盗ろうとしたのだという。そして、相手に拒絶されると、激昂して殺してしまったのだそうだ。

私は急いで警察署に向かった。そして、やっとの想いで面会に辿りついた時、翔ちゃんはへらへらと笑っていた。

「まいったよ、まったく。あんなことで死ぬとは思わなかった」

という言葉で翔ちゃんの口から聞いた時、私は開いた口が塞がらなかった。被害者の方は三十代のサラリーマンで、今年、長年の不妊治療の末、子どもが生まれたばかりだったということがニュースで大きく報道されると、たちまちこの事件に世間の注目が集まることになった。そして、殺害方法の詳細

細が大々的に報じられると、世間に火が点いた。

翔ちゃんたちは被害者の男性を身の毛もよだつような残虐な方法で殺害した。二時間以上も殴る蹴るの暴行を加えた後、歯をペンチで無理やり引き抜き、耳をカッターナイフで削ぎ落とし、証拠隠滅のため、被害者の男性にガソリンをかけて火を点けて生きたまま焼き殺したのだ。

その時、被害者の男性は、泣きながら地面に頭を擦りつけ、子どもが生まれたばかりだから命だけは助けてくれ、と訴えたそうだが、翔ちゃんは、

「なんだ、俺と一緒にじゃん」

と言って、笑いながら火の点いたライターを投げつけたそうだ。そして、断末魔の叫び声をあげながら火達磨になった男性を見て爆笑したそうだ。事件の詳細がニュースで大きく報じられると、世間の怒りの矛先は、拘留所にいる翔ちゃんに対してではなく、彼の家族である私に向かってやってきた。

私たちが暮らすアパートの前には連日のようにマスコミやジャーナリストたちがやって来て、昼も夜も関係なく乱暴にドアを叩き、

「いまどんなお気持ちですか！」

「被害者のご遺族にはもう謝罪がお済ですか！」

「おいッ！ 逃げてんじゃねーよ！ 顔だせや、顔をッ！」

「さっさと出て来い、このヤロー！」

「ボケッ！ カスッ！ さっさと死んで償えやッ！」

と、さながら暴力団を彷彿とさせるような勢いで怒鳴り散らされた。

たまらなくなつて逃げるように実家に戻ると、今度は実家が標的になった。この頃になると、ネット上には私や私の家族の情報が氾濫するようになった。母も仕事を辞めなければならなくなった。実家には、嫌がらせの電話や手紙が殺到し、石が投げられて窓ガラスが割られ、壁に「犯罪者の家！」と大きく赤いスプレーで落書きがされた。親しくしていた近所の人たちからも、

「近所迷惑だからどっかよ所に引っ越してくれ！ 頼むから！」

と怒鳴られたことが一度や二度ではすまなかった。

この頃、学生時代の友人や知人たちから私の近況を心配する電話がかかってきたことがある。ホッとした私は、溜まっていた鬱憤を晴らすかのように、いまの気持ちや憤りを正直に喋ってしまった。すると、それが動画サイトで拡散されて、世間の感情が再び爆発した。

日を追うごとに激しくなる迫害。人目を避け、まるで野ネズミのように日の当たらない場所での生活を送らなければならない毎日。家族の関係は、秒単位で悪化していった。

父は私に対して、

「だからあれほど言ったんだ！ このバカ娘が！」

と怒りをぶつけ、私の頬を思いつきりひっぱたいた。母は私の味方をしてくれず、家の隅にうずくまってすすり泣いているだけだった。

実家にもいられなくなった私は、赤ちゃんを抱いて家を飛び出した。頼るあても、行くあてもなかったが、とにかく逃げ出したかったからだ。

でも、すべての個人情報晒されていた私には、どこにも居場所がなかった。

だから私は堕ちるしかなかったのだ。

地下深くへと。

私は、生きながら地獄へと堕ちた。

………続きは本編にて。